

リ上部ニ突出スルコト百三十四米ニ及ビ從來ノ山頂ヨリ高キコト四十米トナレリ、新山ノ容積ハ概略二千萬立方米ナリ。伊豆大島火孔底ノ鎔岩丘。伊豆大島三原山火孔内ノ狀況ハ大正三年五月盛ニ噴火セル後チト大體變化ナキモ、其後噴出セル灰砂ノ爲メニ孔底鎔岩面ノ小凸凹ヲ幾分填充セル結果孔底ヲ歩行スルハ極メテ容易トナリ、其各部分ヲ精細ニ觀察スルコトヲ得ルニ至レリ。大正七年一月七日乃至九日ニ實見セルニ火孔ハ殆ド全然活動鎮靜ノ有様ニ歸シ、諸處ヨリフワク蒸氣ヲ發生スルノミニシテ大正三年噴火後ノ當時ノ如ク亞硫酸瓦斯ヲ放出スルコトモ無ク、僅カニ孔底東部ニテ微カニア硫酸ノ臭氣アリ、且ツ孔底西北部ニ於テ少シク鹽素ノ臭氣ヲ感シタルノミナリキ。大正三年大活動ノ際ニ生成セル火孔底ノ新山ハ孔底西北半ニ在リ粗ボ南西、北東ニ横ハリ臥牛狀ヲ呈スル一個ノ長丘ニシテ西南部ト東北部トノ二個ノ小山ヲ連結セルモノナリ、西南部小山ノ高サハ三原火孔壁北方斷崖ノ最低部宇川尻ヨリ高キコト約六米ニシテ容積頗ル巨大ナリ、北側ヨリ見レバ丸平ヲタキ頂ヲ示セドモ其ノ南東側面ニ美麗ナル稍々隋圓形ノ噴出口アリ、徑約七十米ニ達ス、内側ハ白色ノ穹窿ヲナシテ噴火ノ當時下ヨリ強キ壓力ヲ以テ鎔岩層ヲ押シ上ゲテ擴メタルガ如クニ見ユ。東北端ノ小山ハ高サ少ク

シク劣リ川尻斷崖ヨリ約四米低キモノトス、此ハ一個ノ隆起セル鎔岩丘ニシテ、噴火ノ當初孔底裂罅ヨリ岩漿ヲ押シ上ゲテ多少圓頂トナレル形跡ヲ存シ、主トシテ樽前山ノ新圓丘ノ如ク輕鬆ナル鎔岩ノ集塊ヨリ成ルモ、其ノ南東側面ハ赭色ニシテ緻密ナル鎔岩ヨリ成リ遠クヨリ望メバ恰モ外皮ヲ塗り添ヘタルガ如キ觀ヲ呈セリ、而シテ此ノ側面ニ無數ノ細キ線條アリ、鎔岩ガ猶ホ柔軟ナリシトキ押シ上ゲラレタル爲メ隣接ノ堅岩ノ爲メ搔キ彫ラレタルモノニシテ許多ノ線條ガ相並ビテ數寸乃至約一尺ノ帶ヲ成シテ幾分ノ凹ミヲ呈シ、其ノ下端ニ此等線條ヲ彫刻セル岩塊ヲ止メタル場合モ少ナカラズ、此ノ鎔岩丘ノ下底南面ニ白色ノ美麗ナル穹窿ヲナセル噴出口アリ、鎔岩昇騰ノ結果生成セルモノト思ハル。明治四十五年三月四月第一期噴火ノ岩屑山ノ脊後ニ生ゼル孔底ノ小鎔岩丘モ類似ノ線條ヲ示セリ。

第十一章 櫻島噴火ニ伴ヘル鹿兒嶋灣

潮位ノ變動

五七 潮位ノ高昇 大正三年一月ノ櫻嶋大噴火後ハ鹿兒嶋灣内ノ潮位陸岸ニ對シテニ變動アリ、同年三月十三日ノ大潮ニ際シテハ鹿兒嶋港ノ潮水ハ量水標ノ零位ヨリ十二尺二寸ノ

高サニ達シ、濱邊鹽田等ニ浸入シテ多少ノ損害ヲ與ヘタリ、營テ鹿兒嶋縣土木課所屬ノ港務所ガ施行セル明治三十六年一月乃至三十八年四月ニ亘ル潮位讀取り表ニヨルモ最高潮位ハ一尺三寸ニシテ明治三十七年九月十一日(舊曆八月一日)即チ八朔ニ當ル)ニアリ、三月ニアリテハ大潮ノ際モ潮高ハ十尺一寸乃至十尺七寸ニ過ギザリシニ、噴火後六三月潮ニ於テ既ニ此ノ潮位ヨリ一尺五寸ノ超過ヲ見ルコト、ナリ同年八月、九月、十月ニ及ビテハ鹿兒嶋灣ノ潮位ハ更ニ一尺内外ノ増加ヲ示スニ至リ、八月二十四日ノ暴風雨ニ際シテハ堤防ノ破損、田地ノ浸水等アリテ損害少ナカラズ、灣頭國分附近ノ堤防ヲ修築スルニモ約四十萬圓ノ費用ヲ要スルニ至レリ。

五八 鹿兒嶋港各月ノ最高潮位 大正三年一月大噴火ノ前後各月ニ於ケル鹿兒嶋港ノ最高潮位ヲ第二十七表ニ示ス、即チ各月絶對的の最高潮位ハ明治三十六年一月ヨリ三十八年四月ニ比シテ大正三年二月ニ於テハ格別ノ差無キガ如クナルモ三月乃至十月ニ至リテハ一尺二三寸ヨリ一尺五六寸ヲ増加シ八月ニハ暴風雨ノ影響モアリシガ更ニ増シテ二尺五寸ノ差ヲ示スニ至リ、即チ最高潮位十三尺五寸ニ達シタリ、大正四年及ビ五年ニモ八月若クハ九月ニ於テ十三尺零寸乃至十三尺一寸ナル最高潮位ヲ示セリ。但シ日々ノ潮位干満ノ差ハ噴火後ニアリ

テ特ニ増大セルガ如キ形跡ハ全ク認メザル所ナレバ噴火後ノ異常ナル高潮ハ干満差異ノ増減ニハ關スルコトナクシテ、全ク平均潮位ノ上昇セル結果ナリトス(第二十五圖參照)。

五九 鹿兒嶋港各月ノ平均潮位 第二十七表ニ明治三十六年一月乃至三十八年四月ノ月別平均潮位ヲ與ヘ更ニ其ノ各月平均價值ヲ大正三年二月ヨリ七年六月迄ノ分ト對照セリ(大正三年五月乃至四年一月ノ分ハ午後六時前後ヨリ午前六時頃迄ノ觀測ヲ缺クヲ以テ此クシテ得タル平均潮位ハ素ヨリ概略ノモノナリ)、平年即チ噴火前ニ比シテ噴火後ニ至リ鹿兒嶋港潮位ノ高キコト(陸岸ニ對シテノコトナリ、以下同ジ)著ルシク、大正三年二月ヨリ四月迄デノ噴火後ノ三ヶ月ニ於テハ平均一尺三寸六分ノ差ナリシガ同年末ニ及ビテ平均潮位ノ上昇ハ其ノ極ニ達シ、爾後少コシク低下シタルガ、大正四年二月ニハ尙ホ二尺二寸五分ナル差ヲ示シタリ、高昇セル潮位ハ漸次回復ノ傾向ヲ有スルモ、其ノ割合甚ダ緩慢ニシテ大正四年乃至六年ノ平均潮位差ハ左ノ如クナリキ(第二十五圖參照)

大正四年	一尺八寸八分
大正五年	一尺六寸七分
大正六年	一尺四寸二分
六〇 安永噴火後ノ狀況	今ヨリ百三十九年前ニ當ル安永八

年(西曆千七百七十九年)ノ櫻島大噴火後ニモ鹿兒島ニ於テ顯著ナル海水ノ増溢アリシハ橘南谿ノ著西遊記中ノ「海水増減」ノ條ニヨリテ明ナリ、次ニ鈔出スルガ如シ、

「……安永年中櫻島大燒ノ以後、此海(鹿兒島ノ海)ノ水五六尺高クナレリ、所ニヨリテハ一丈餘モ高シ。鹿兒島ノ城下モ、下町築町トイフ邊ハ、月ノ十五六日潮ノ高ク滿ル時ニハ、近年海水町ニ溢レ上リ、甚ダ難儀ニ及ベリ。余ガ旅宿セシ小山幸右衛門宅ナドノ庭ノ中ニ潮ミチ來リ、常々難儀セリ、十四五日ノ頃潮高ケレバ、町中高下駄ニテモ歩行シガタク、洪水ノ如シ、國主ヨリモ色々堤ナドヲ築テ潮ノ防アレドモ、全體ノ海高ク成タル事ナレバ、イカントモシガタシ。大隅ノ國加治木ノ近邊ノ濱手ノ村ハ、潮ニ引取ラレタル所モアリ、又潮ニタヘカネテ、一村引ハラヒ、高キ地面ニ移リ住ル村モアリ、カ、ル大海ノ水ノ、五尺モ一丈モ全體ノ高クナレル事、イカナル故トモシル人ナシ。……彼邊ノ人ノ一説ニハ、櫻島ノ峯ヤケテ土中ヨリ夥敷土砂ヲ吹出シタレバ、薩摩大隅二ヶ國ノ地中ノ土砂ヲ吹上ゲテ、此二國ノ土地低ク成リタル故ニ、潮高ク上リ來ルナリトイフ。コレモアマリ廣大ナル説ナリ。イヅレ此入海バカリノ水、櫻島燒ノ後ヨリ高ク成タルハ奇異ノコトナリ。」

前文ニヨルニ安永大噴火後ニ至リテ鹿兒島市街地ノミナラズ加治木、國分等附近ヲ始メ鹿兒島灣北部沿岸ノ地ハ異常ナル高潮ノ災害ニ會ヒタルナリ、橘南谿ガ鹿兒島ニ旅行セル年月ノ記載無キモ西遊記中安永噴火後ニ海中ヨリ湧出セル新島(燃島)ノコトナリ安永嶋トモ稱スニ關スル記事、出來嶋ノ條ニ「彼嶋堅マリ、國土ト成レリ。余ガ彼地ニ遊ビシ頃ハ、彼嶋出來テヤウ／＼四五年ニモヤ成ラン、ホド近キ事ナレバ、嶋ノ上ニ草木モナク、唯白砂ノ嶋ナリキ。……トアリ、南谿ガ出來嶋ニ行キタルモ鹿兒嶋ニ遊ベルト同時ナルベケレバ前掲潮水高溢ノ記事モ亦安永大噴火後四五年目、即チ天明二、三年ノ頃ニ關スルモノト見テ差支無カルベシト思ハル、果シテ然リトスレバ安永噴火後ノ増潮ハ四五年ヲ經ルモ容易ニ減衰セザリシモノタルハ明ナレドモ、此ノ變動ガ幾年間繼續セシカ、又タ十數年若クハ數十年ヲ經タル後ニ至リテ始メテ終熄セシカ、或ハ終ニ其儘トナリシカハ更ニ記錄ノ徵スベキモノ無キモ、後ニ述ブルガ如ク蓋シ數十年後ニハ潮水再ビ次第ニ減退シテ舊態ニ近キ高サニ戻レルモノナラント想像セラル。

六一 潮水高溢ノ原因如何、鹿兒嶋灣今回ノ高潮ハ安永噴火後ニ於ケルト殆ド其ノ狀況ヲ相等フスルガ如シ、今回ノ潮位變動ハ鹿兒嶋港ニノミ限リタルニ非ズ少ナクモ鹿兒嶋灣北

部全般ニ亘ルモノニシテ、平均水位ノ高昇ハ例年ニ比シ鹿兒嶋港ニテハ一尺五寸乃至二尺内外ナルモ、少シク北ニ至リ重富附近ニ於テハ三尺若クハ四尺ノ高昇ヲ示スガ如シ、櫻嶋ニ在リテハ潮水ノ浸入一層甚シク、嶋ノ北岸高免ニテモ爲メニ濱邊ヨリ家屋二軒ヲ取り拂ハザル可カラザルニ至リ白濱ニテハ濱邊ノ道路ガ潮水ニ覆ハレ、大潮ノ際ニハ其レニ接セル幅二間程ノ島地モ水下トナリ、海水ハ更ニ高サ七尺程ノ石垣ヲ越エテ宅地ニ及ベルアリ、嶋ノ南西部ナル野尻及ビ他ノ部分ニテモ同様ノ高潮アリ、又々鹿兒嶋市ニ面セル櫻嶋ノ西端ナル袴腰高臺地外面ノ裾地ハ高潮ノ爲メ全ク水ニ覆ハル、コトアル等ノ事實ニヨルニ、櫻嶋沿岸ニ於ケル潮位ノ上昇ハ六尺内外ナラント考ヘラル。要スルニ高潮ノ現象ハ鹿兒嶋灣沿岸ノ地ヨリモ櫻嶋ニ於テ更ニ甚シキモノナリトス。

鹿兒嶋灣潮水高昇ノ原因トシテ先ヅ人ノ唱フルハ(甲)櫻嶋東南端ト大隅ノ間ナリシ瀬戸海峽ガ當年一月末日ヨリ二月初メニ掛ケテ次第ニ閉塞セルコトト(乙)高熱ナル鎔岩ガ海中ニ流入セル爲メ幾分カ海水溫度ノ増加ヲ來タセルナラントノ二ヶ條ナリ。此等兩者ノ事實ガ海水増溢ノ原因トハ成ル得ベキナランモ、其結果ハ極メテ微々タルモノナルベキハ鹿兒嶋港平均潮位ノ高昇ガ大正三年八、九、十月ニ至リテ噴火後ノ當初ヨ

リ一層著シキノ事實ニ照ラシテ明ナリトス、且ツ安永大噴火ノ際ニハ海峽ガ閉塞セラレタルコト無キヲ見レバ今回ノ瀬戸海峽閉塞ハ潮流ニ變動ヲ來タセルハ勿論ナルモ海潮増溢ノ必要原因タラザルヲ知ルベシ、又々鹿兒嶋港内竝ニ櫻嶋鹿兒嶋間水道ノ表面水温ハ余ガ實測セル結果ニヨルニ大正三年一月中旬(十八日前後)ニ於テハ攝氏十六度七ニシテ明治四十三年乃至四十五年中ノ相當時期ノ水温(鹿兒嶋測候所驗測ニヨル)ヨリ約一度五ヲ高メタリシガ、大正三年四月中旬ニハ約十六度六トナリ、九月中旬ヨリ十月初旬ニ亘リテ約二十五度二トナリ平常年ノ相當時期ニ對スル水温十六度八ト二十五度六ト其レノ格別ノ差異無キニ至リ、以テ潮水溫度ノ變化竝ニ其ノ潮位ニ及ボスベキ結果ガ顯著ナラザリシヲ見ルベキナリ。然ラバ鹿兒嶋灣内潮水増溢ノ原因ハ如何ト云フニ次節ニ述ブレル如ク土地ノ低下ニ歸スベキナラント考ヘラル。

六ニ 土地ノ低落、櫻嶋破裂現象ノ特點トスベキハ其ノ山體ノ微小ナルニ關セズ噴火ガ極メテ盛大ナルニアリ、今回破裂ノ噴出物ノ總量ヲ推算スルニ、鎔岩流ノ容積ハ約一・五六立方「キロメートル」、又々輕石、砂灰ノ容積ハ約〇・六二立方「キロメートル」ニシテ合計二・二立方「キロメートル」トナリ、櫻嶋ノ全容積(海面上ノ分ナリ、海面下ノ分ヲ合スルモ格別ノ差トナラ

(震災前之分、明治三十六年乃至三十八年之平均値)

R
14

13

12

11

10

R
9

8

7

6

5

I III V VII IX XI I III V VII IX XI I III V VII IX XI I III V VII IX XI I III V VII IX XI I III V VII IX XI

大正三年 (1914)

大正四年 (1915)

大正五年 (1916)

大正六年 (1917)

大正七年 (1918)

(震災前)

(震災後)

(震災前)

(震災後)

每月平均潮位

每月最高潮位



ズ二十六・五立方キロメートルノ約十二分一ニ當ル、而シテ櫻嶋ノ面積ハ四・五三平方里ニシテ東京市ノ面積ト殆ド相等シ、若シ今回破裂ノ巨量ナル噴出物ノ總量前記二・二立方キロメートルヲ櫻嶋或ハ東京市ニ分布シタリト假定スレバ全體ヲ約九十尺餘ノ深サニ迄テ埋没スルニ至ルベキナリ、此ノ如ク多量ナル鎔岩ヲ噴出シタレバ噴火活動ノ減衰ト共ニ噴孔内部、即チ地下ニ貯藏セラレタル岩漿ハ漸次沈降スルニ至ルベク其結果ハ火山下ニ幾分ノ空竅ヲ生ズルカ、若クハ岩質ノ密度ヲ減少セシメ、爲ニ山體全般及ビ其ノ四接ノ地盤ハ多少陷落スベキナリ、故ニ今回鹿兒嶋灣ノ潮水増溢ハ鹿兒嶋灣ノ北部全體竝ニ其ノ隣接ノ土地ガ一般ニ陷落シタルノ結果ナルベク、從ツテ變動ハ櫻嶋海岸ニ於テ最モ著ルシキヲ致セル所以ナルベシ、果シテ然リトスレバ潮水増溢ノ現象ハ今急ニ止ムベキニ非ズシテ數十年ヲ經テ櫻嶋火山ノ地下活動力ガ再ビ増進シテ山體ニ上壓力ヲ加ヘ地盤ヲ昇起セシムルニ至リテ潮位ハ始メテ常態ニ復スルモノナランカト想像セラル、蓋シ安永噴火後モ斯カル順序ヲ繰リ返ヘシタルモノニシテ、要スルニ噴火ノ盛衰ニ伴ヒ長週期ヲ以テ櫻嶋及ビ鹿兒嶋灣北部ノ地盤ガ隆起、陷落ノ變動ヲ交互ニ示スモノナルベキナリ、今ヨリ五六十年前ニハ鹿兒嶋市北部ノ稻荷川及ビ重富村附近ノ別府

川ノ如キハ頗ル上方迄テ潮水ノ逆流セルモノナリシニ近來ハ漸次此ノ事實ノ減少スルニ至レリ、川口ガ土砂ノ爲メニ一部分閉塞セラル、ノ爲ナランモ知ル可カラザレドモ、鹿兒島甲突川川口石垣ガ著シク泥土ニ埋マレル形跡無キノ事實ニ徴スルモ、土砂閉塞ノ結果ハ甚シカラザリシモノト思ハル、又國分町附近濱之市ノ小港ハ嘗テ漸次海水引退ノ徵アリ大正三年大噴火ノ前數年間ハ此ノ傾向甚シク遂ニ港内ニ船艇ヲ使用スルコト能ハズシテ荷車ヲ以テ小蒸汽船迄テ往來スルニ至リ、人民ハ海ガ遠ザカルヲ不思議ニ思ヒ居リタルハ、即チ海底陸地共ニ隆起シツ、アリシ結果ニ外ナラザリシナリ、而シテ今回大噴火後ニハ地盤ノ低下アリ、爲メニ濱之市港ノ潮水ハ再ビ増加シテ前時ノ如キ狀況ニ復歸シタリ、安永噴火後ニ陷落シタル鹿兒嶋灣北部附近ノ地盤ハ五六十年ヲ經テ其ノ原位置ニ迄テ恢復シタルノミナラズ、火山活動力ノ増加ニ伴ヒ、更ニ地下ヨリ上方ニ壓セラレテ爾後ハ却ツテ隆起現象ヲ示スニ至レルナルベシ、即チ安政頃ヨリ五六十年間潮水ガ漸次減退セル所以ニシテ其ノ地盤隆起ノ極、遂ニ大正三年ノ大破裂トナリタルナルベシ、斯ク百二三十年ノ週期ヲ以テ櫻嶋ガ隆起、破裂、陷落スル變化ノ順序ハ今後モ繰リ返ヘサルベキナリ、大正三年一月ノ櫻嶋噴火ハ十二日午前十時頃ヨリ始マリ、同

第二十七表 鹿兒嶋港毎月ノ最高及平均潮位(†)

(噴火前後ヲ比較ス)

噴火前後區別		噴火前 (明治)				噴火後 (大正)				
年		三六年	三七年	三八年	平均	三年	四年	五年	六年	七年
月		尺	尺	尺	尺	尺	尺	尺	尺	尺
毎月最高潮位	一月	11.2	9.8	10.4	10.5	—	11.3	11.4	11.6	11.2
	二月	11.0	10.3	10.3	10.5	10.8	12.1	11.8	11.5	11.7
	三月	10.1	10.7	10.5	10.4	12.2	11.8	11.8	11.5	11.7
	四月	10.0	10.2	10.6	10.3	11.8	12.0	11.6	11.5	11.5
	五月	10.0	9.7		9.9	11.5	11.8	11.9	11.6	11.8
	六月	10.6	10.5		10.6	11.7	12.2	12.2	11.5	11.3
	七月	10.7	10.8		10.8	12.1	12.1	12.3	12.3	13.3
	八月	10.6	11.0		10.8	13.5	12.7	13.0	12.8	
	九月	11.1	11.3		11.2	12.7	13.1	12.3	12.9	
	十月	10.7	11.3		11.0	12.9	12.5	12.5	12.6	
	十一月	10.3	10.2		10.3	12.2	12.5	12.3	12.1	
	十二月	9.7	9.9		9.8	11.3	11.6	11.7	10.9	
毎月平均潮位(※)	一月	5.81	4.85	5.19	5.29	—	(8.06)	6.65	6.81	6.35
	二月	—	5.04	4.98	5.01	6.43	7.26	6.80	6.46	6.67
	三月	5.36	5.33	5.10	5.28	6.68	7.26	6.77	6.35	6.62
	四月	5.15	5.26	5.31	5.24	6.54	7.07	6.94	6.55	9.55
	五月	5.24	5.22		5.23	(6.69)	7.04	7.10	6.75	6.75
	六月	5.54	5.66		5.60	(6.99)	7.39	7.16	7.10	6.79
	七月	5.85	6.04		5.95	(7.17)	7.49	7.40	7.22	
	八月	5.78	6.29		5.04	(7.71)	7.76	8.01	7.61	
	九月	5.93	9.29		6.11	(8.11)	7.69	7.49	7.55	
	十月	5.93	5.95		5.94	(8.10)	7.54	7.43	7.43	
	十一月	5.35	5.35		5.35	(8.35)	7.34	7.39	6.85	
	十二月	5.12	5.13		5.13	(8.10)	6.82	7.05	6.46	
噴火後毎月平均潮位ノ増昇(†)	一月					—	(2.77)	1.36	1.52	1.06
	二月					1.42	2.25	1.79	1.45	1.66
	三月					1.40	1.98	1.49	1.07	1.34
	四月					1.30	1.83	1.70	1.31	1.31
	五月					(1.46)	1.81	1.87	1.52	1.52
	六月					(1.39)	1.79	1.56	1.50	1.19
	七月					(1.22)	1.54	1.45	1.27	
	八月					(1.67)	1.72	1.97	1.57	
	九月					(2.00)	1.58	1.38	1.44	
	十月					(2.16)	1.60	1.54	1.54	
	十一月					(3.00)	1.99	2.04	1.50	
	十二月					(2.97)	1.69	1.92	1.33	

(†) 零位ハ鹿兒嶋市小川町參謀本部水準點以下十四尺六寸一分三當ル

(※) 大正三年五月乃至四年一月迄ハ夜間ノ觀測ヲ缺クナリテ平均潮位ハ不正確ナリ(活弧ヲ附ス)

(†) 噴火前平均潮位トノ差ナリ

日午後六時三十分頃ニ一回ノ激震アリシガ、其レヨリ約一時
間ヲ經テ鹿兒島市ノ海岸ニ小津浪ヲ押シ寄セタルハ、思フニ
幾分カ海底ガ陷落セル結果ニシテ、鹿兒嶋灣潮位高昇ノ原因
トナリタル地盤ノ低下ハ此ノ時刻ヨリ開始セラレタルモノナ
ランカ。因ニ日向國細嶋ノ驗潮儀記錄等ニヨルモ鹿兒嶋灣ノ
高潮ハ日本全國若シクハ九州全般ノ如キ大地域ノ總體ノ陷下
ニハ非ズシテ鹿兒嶋特殊ノ變動タルハ明ナリトス。

第十二章 噴火ニ伴フ地盤ノ隆起、

陷落

六三 噴火ト地ノ昇降 大ナル噴火ニ際シ若クハ其ノ前ニ當
リテ、地下ノ噴火力、即チ火山下ニ鬱積セル瓦斯蒸氣ノ張力及
ビ鎔岩ノ涌騰ガ強盛ナル上壓力ヲ地殼ニ與フルノ結果、山體
及ビ其ノ附近ノ地ヲ多少押し上グルコト、ナルベキナリ、而
シテ大噴火ガ終了セル後チ即チ大ナル爆發若クハ多量ノ鎔
岩流出アリタル後チハ山體及ビ四周ノ地ハ多少低落スベキモ
ノナルベシ、此カル變化ハ櫻島有珠岳ノ如ク山體小ナルニ關
セズ噴火盛ナル火山、殊ニ海灣、湖水ニ隣接セル場合ニ判明ナ
ルベキナリ。前記兩火山ノ外ニモ、富士帶南部ノ豆南海中ヨリ
數次新島噴出ノ現象アリタリ。

六四 豆南海中、新島涌出ノ例 豆南海中ニ於テ噴火ノ結果ト
シテ新島ヲ涌出セルコトハ古來稀ナラザリシガ如シ、左ニ新
舊二三ノ例ヲ錄ス。

(I) 慶長十年十二月十五日(西曆一六〇六年一月二三日)八丈島
附近ニ海底噴火アリ一嶼ヲ生成ス。

(II) 明治三年四月(西曆一八七〇年五月)地大ニ震ヒ青ヶ島ヨリ
南東ノ方二十五里ノ海中ニ一小嶼ヲ噴出ス。蓋シ「ベヨネーズ」
嶋附近ノ海底噴火ナルベシ。

(III) 明治三十七年(西曆一九〇四年)十一月二十八日頃、南硫黃島
ノ北東約三哩ノ海中、北緯二十四度十六分三十秒、東經百四十
一度三十分ノ邊ヨリ噴火シ、十二月五日ニ及ビテ噴煙中ニ小
島ヲ認メ得ルニ至リ、翌明治三十八年二月一日ニハ新島ノ周
圍約一里七町トナル、最高個所ハ海面上約八十間ニ達セリ、然
ルニ同年六月十六日ニハ新島ハ既ニ殆ド消滅ニ歸シ僅ニ水面
ニ背ヲ現ハスニ過ギザルニ至レリ。

(IV) 大正三年(西曆一九一四年)一月二十三日頃、南硫黃島ノ北々
東約三海里、北緯二四度一六分三分、東經一四一度二九分ノ海底
ヨリ再ビ噴火セリ、二十五日午後一時頃ニ及ビテ一新嶼ノ湧
出セルヲ認メタリ、其ノ周圍約千九百間、面積約二十七萬五千
坪ニシテ高サ海面上約四百尺ニ達セリ。大正五年六月二十九